武漢のバイオセミナー

2011.1.08

香港　花木

昨年発表された戦略性新興産業 7 分野の中にバイオ産業が含まれていたように、中国政府はいま、自主創新政策の目玉となる高付加価値産業の１つとしてバイオ産業に注目し、その育成に力を入れている。年明け早々、その拠点の 1 つである湖北省武漢市のバイオシティ（生物城）で行われたバイオ産業（生物医薬）セミナーに参加したところ、以下、その模様とあわせて会場となった武漢バイオシティ（固有名詞として「生物谷」（バイオレイク）と称しているので以下武漢生物谷（バイオレイク）と記載する。）の近況を写真を中心に報告したい。

（１）武漢生物谷（バイオレイク）

武漢バイオレイクは武漢市内東部の「東湖開発区」内の一角に 2 年前に開設された。この開発区の総面積は 518 ㎢（51,800ha）とほぼ東京 23 区の総面積（621 ㎢）に匹敵するほど広大であり、それに比べればバイオレイクは 3%にも満たない規模であるが、それでも千代田区の総面積の 1.5 倍に相当し、「神戸医療産業都市」が位置しているポートアイランド全体（826ha）の倍に相当する。とにかく中国という国は何でも桁違いの大きさであり、毎度のことではあるがいちいち日本と比較するとその大きさに圧倒される。

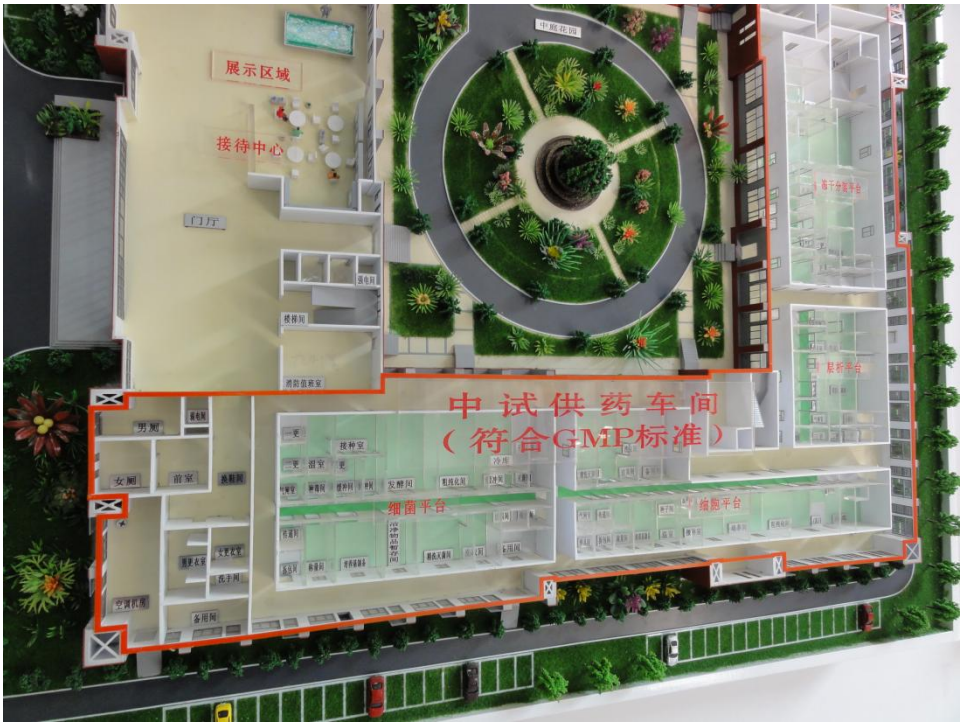
↑　武漢バイオレイクの入り口。奥に見える建物は受付ビルディング。

↑　受付ビルの中にある案内図。赤枠内がバイオレイクであり、西部地区（研究施設及び創業支援施設地区）と東部地区（工場地区）に分かれている。画面下には昨年 8 月に武漢進出を決めた富士康（Foxconn）のパソコン工場用地も見える。

↓　ヘッドクオーターである西部地区の模型。

武漢バイオレイクは建設開始からわずか 2 年しか経っていないものの、敷地内の建物はかなり整備が進んでいた。特に一般企業が入居する共同ビルはほぼ完成し、使用を開始していた。（内部にはインキュベーション施設もある。）

↑　一般企業が入居するビル。1 階には共同施設（展示場、会議室、打ち合わせ室等）の他に GMP 基準を満たした薬品の試験生産施設も設けられている。（下図模型参照）



武漢バイオレイクの目玉は何といっても世界最大の製薬会社Pfizerが昨年10月に立地を決めた武漢 R&D センターである。立地セレモニーには Pfizer 本社からジェフ・キンドラーCEO 以下約 70 名が特別機で武漢空港に乗りつけ、湖北省書記、湖北省長、武漢市書記、武漢市長等の地元幹部が総出でこれを迎えるほどの歓迎ぶりだったようだ。これは、武漢バイオレイクが初めて外資系企業の誘致に成功したこと、及びそれが世界一の製薬会社のしかも R&D センターであることの喜びを率直に表したものと言えよう。実際、Pfizer の R&D センターはバイオレイクの正面、受付ビルのすぐ隣という最高の立地場所を与えられ、その建設はまさにたけなわという状態であった。

↑　受付ビル（奥）の隣には Pfizer 幹部が武漢を訪れた際の記念碑がたつ。

また、計画によれば敷地内に食品安全関連研究施設のほか、出入国管理施設、税関、検疫施設更にはスーパーコンピュータセンターも設けられ、企業に対してワンストップサービスが提供される予定のようである。この辺りの手法は深セン特区以来の中国の伝統となっている「開発区に総合的な行政機能を付与する」手法であり、縦割り行政の弊害は基本的に解消されている。（更に最近はいくつかの開発区で行政機能を持つ組織を株式会社化し、効率を上げているとも聞く。）

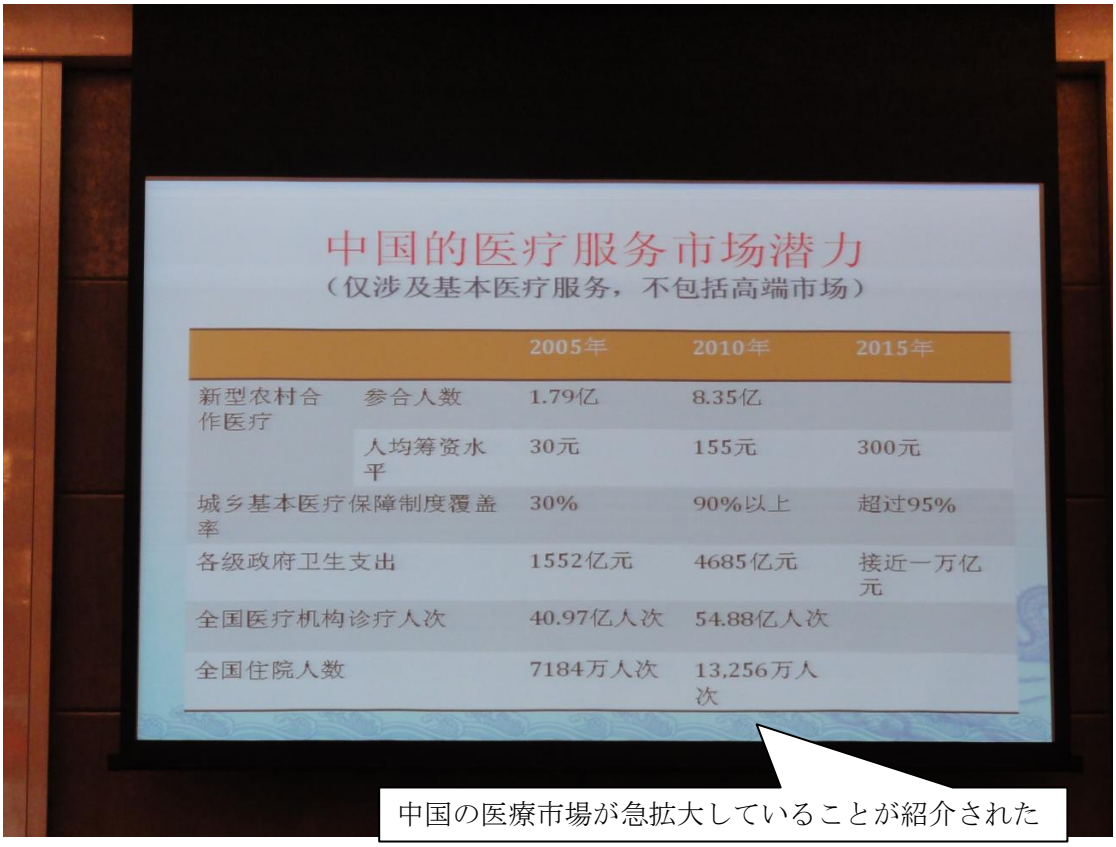
なお、武漢バイオレイクは海外の同様の機能を持つバイオシティとの提携を進めているようで、受付ビルには以下のように提携関係を示した地図が誇らしげに掲載されていた。

（2）武漢バイオセミナー

バイオセミナーは今回が初の開催のようであり、一般的な中国のセミナーやシンポジウムに比べるとかなりその規模は小さく、参加者も 200 人程度であった。ほとんどは中国国内の関係機関（衛生部、商務部や研究機構、関係企業及び投資家）であったが、欧米からの参加者も散見された。（我が国の参加者は見かけなかった。）

↑　欧米系製薬会社のプレゼンが続く。

内容的には正直言って目新しい話はなく、中国が自主創新政策としてバイオに力を入れていること、武漢には武漢大学と華中科学技術大学という有名大学を中心に大学生が100万人（！）もいること、人口規模が大きく生活水準が上がっている中でバイオ産業の市場規模が更に拡大すること等の説明が相次いで行われた。



		2005年	2010年	2015年
新型农村合作医疗	参合人数	1.79亿	8.35亿	
	人均筹资水平	30元	155元	300元
城乡基本医疗保障制度覆盖率		30%	90%以上	超过95%
各级政府卫生支出		1552亿元	4685亿元	接近一万亿元
全国医疗机构诊疗人次		40.97亿人次	54.88亿人次	
全国住院人数		7184万人次	13,256万人次	

中国の医療市場が急拡大していることが紹介された

確かにこうしたことがあるからこそ欧米系製薬会社も中国に注目しているのであろうが、一方で薬価の政策的な抑制や知的財産権の問題等も引き続き重要な課題であり、慎重な評価が必要な面もあろう。この点については具体的な議論はなかったが、バイオ産業でも製造業同様、「市場の魅力」のためには多少の問題には目をつぶらざるを得ないという構図ができつつあるのではないかと推測する。

なお、最近筆者が香港で聞いた話だが、ある難病にかかった方が香港の最高クラスの病院で専門医を受診したところ、当該医から北京の専門医を紹介されたということである。「こうした症例は香港ではせいぜい年間数例しかないが、北京ならば何百件と見ている先生がいる。」というのがその理由とのこと。このように圧倒的に多数の症例が得られることや、それによりこれまでは採算に乗らなかった難病薬が採算化される可能性があることが、治験の容易さと相まって、実は製薬会社ひいては医療産業全体にとっても中国の持つ大きな魅力と言えるのではないだろうか。

（以上）